（第3種郵便物認可）　福井県民新聞

変革期迎える県内の高校

社会で活躍できる人材を

県内の高校の在り方が変革期を迎えている。県教委は、少子化の影響で県立高の存続が困難な状況となる見込みなどから、進学や就職を支援し、社会で活躍できる人材の育成を進める。私立高も従来の特色の部活動に加え、進学に重点を置いた指導へとかじを切り始めている。

新たに設けられた科目「ふくいの産業」の授業の様子＝福井市の科学技術高で

県立、独自色を打ち出す

「いろいろな産業の魅力に触れて、いつか天職を見つけてほしい」。四月二十七日に科学技術高（福井市）で開かれた新科目「ふくいの産業」。建材卸や建物の内装工事などを手掛ける「タッセイ」の田中陽介社長(四〇)の言葉に一年生百六十人が耳を傾けた。

「ふくいの産業」は、卒業後は就職を目指す職業系高校の生徒に、地域産業の現状や先端企業の取り組みを学んでもらう新しい科目。経営者や起業家らが講師を務め、オンラインで実施する。県教委の担当者は「専門分野の知識と、他の分野の知識をリンクさせるキャリア教育の一環」と位置付ける。

他にも、「話せる英語」の取得を目指す県独自の英語検定も新設する。四～一級があり、外国人観光客に福井の観光地を紹介する力をつける。三級以上では外国語指導助手（ＡＬＴ）からの質問に答えられるようになること、一級では根拠を示しながら説明できるようになることを目指す。

級を取得すると、資格取得やコンクール入賞などを得点化する県の「福井フューチャーマイスター制度」に加算され、就職の時にアピール材料の一つとして生かすことができる。県教委の担当者は「英語を活用し、地域で活躍できる人材の育成を目指していく」と話す。六～七月に各校で第一回を開催する予定だ。

さらに、難関大学や医学部への進学を目指す普通科の生徒向けに「大学進学サポートセンター」を開設。学校の授業では対応できない高度な補習や模擬試験の機会を提供し、生徒たちが切磋琢磨できる環境を整えている。

私立、進学に力を入れる

これまで部活動に力を入れてきた私立でも変革が進む。今春初めて東京大合格者を出した福井工大福井高（福井市）。十一年前に特別進学科を設置し、県外から予備校の講師を招いて授業を実施するなど、難関大を目指す生徒たちを支援してきた。佐々木栄秀校長(六二)は「これまではトップ大学に生徒を受からせるノウハウを確立していなかった。生徒も教師も、目指すべきゴールを実感できた」と意義を話す。

二〇二一年度からは一こま五十分を四十五分とし、一日七こまの時間割に変更した。二こま続けて計九十分の授業時間を使い、発展的な学習やプレゼンテーション力の向上に取り組む時間を確保できるようになった。佐々木校長は「東大に受かるだけでは意味がない。その先を見据えて、社会で活躍できる子どもたちを育成していく」と話す。

ふくい掘れ惚れ

将来担う若者の育成を

取材後記　波多野智月記者

自分は中学受験が主流の埼玉県出身。中学・高校と６年かけて勉強し、有名大学に進学する。そういう人生が最善とされてきた気がする。

「勉強ができても、社会で活躍できないのでは意味がない」。取材した教育関係者たちは口をそろえてこう言った。これからは詰め込みではなく、実践型の教育を進めていく時代。将来を担う若者の成長が楽しみだ。